

同和問題（道徳）学習指導案

平成2年12月13日（木） 第5校時

2年D組 男子19名、女子19名、計38名

指導者 西野郁恵

1. 主 題 真実に生きる （資料『私の目をみて！』）

2. 主題設定の理由

「ええで やるで がんばるで！」という学級目標と、肩を組み合わせ前進する人の姿がしるされている。それが、2年D組のシンボルである学級旗である。「2年生の営みを、クラス全員で力を合わせて頑張っていこう。共に前進していこう。」という思いが込められている。そういう思いでスタートし、4月以来、日常の生活やさまざまな学校行事を通して、お互いをよく知り、絆を深めてきたと思う。そして体育祭では、クラスが一つになって頑張り、みごと優勝し、クラスの一人一人の力は小さくとも、団結すると大きな力になることと、団結することの喜びを味わった。

一方、2年生全体で取り組む同和問題学習も続けてきた。「決染一揆」では、人間らしく生き抜こうとする人間の強さと連帯のすばらしさを学んだ。「ミナコ逃げるな」では、弱い立場にあるものを大切にする、支え合う集団になろう、ということを経験した。また、解放文化展への参加などを通して、一人一人が「人間の生き方」や「差別」について考え、少しずつ意識も変わりつつあるように思う。しかしその反面、人のいやがるような心ない言動によって友人を傷つけたり、特定のクラスメイトを避けようとするような気質が、表立って出てくることは少なくなってきたものの、まだまだクラスの中に潜んでいる。そして、そういうクラスの雰囲気に対して、「いやだ」とは思っても、何も言えなかったり、見て見ぬふりの無関心を装っている生徒も多い。

現時点のこのクラスに対して、一人一人がかげがえのない存在なのであり、自分を大切にすることは他人をも大切にすることだ。たくさんの人の中で生き、支えられている私たちは、自分だけ幸せになることなどできない。相手の立場になって考えることができる思いやりの心をもってほしい、という学習を続けている。そして、誠実に、人間らしい生き方をしてほしいと願っている。

本資料、「私の目をみて！」では、初め職場の差別に負けそうになりながらも、勇気を持って自分の出身地を告げた勝子が描かれている。勝子の真実を貫こうとする生き方には、大きく心を動かされる。「こういう厳しい差別があるのか。」という暗い事実をつきつけることに決して終わることなく、まず、人間が人間らしく生きようとする願いを打ちくだいていく残酷な差別に対して憤りをもたせたい。そして、勝子の勇気をもち真実を貫き通そうとした前向きな生き方に共感させ、たとえつらくとも、たとえ一人でも、ゆずってはならないものがあることに気づいてほしい。その上で、何が真実かを見抜き、差別解消に向けて積極的に取り組む態度を育てたいと考え、本主題を設定した。

3. ね ら い

真実を貫こうとした前向きな生き方を学び、差別解消に積極的に取り組もうとする態度を育てる。

4. 視 点 真実と正義

5. 指導計画

(1) 常時指導

学活、あゆみ、学年通信「ねんりん」などを通して、自分の生活を見つめる態度を育てる。

(2) 関連的指導

道徳「星置きの滝」（私たちの道徳）

互いに相手を尊敬し、相手の向上を願って助け合い、励まし合って、真の友情を育てるように努めさせる。

(3) 核心的指導

道徳「私の目をみて！」・・・・・・3時間（本時3/3時間）
（被差別部落のたたかい）

(4) 発展としての関連指導

学指「同和問題学習と私」

これまでの同和問題学習をもとに、自分と同和問題とのかかわりを話し合い、さらに考えを深めさせる。

(5) 常時指導（発展）

人間らしい真実の生き方を求め続ける中で、相手の立場になって物事を考え、支え合う学級作りをする。

6. 本時の指導

(1) 目 標

勝子の真実を貫こうとした生き方に共感させるとともに、勝子の前向きで力強い生き方を学び、自分たちの生活を見つめ直し、自ら差別解消に向かう意欲を養う。

(2) 展 開

学習活動	主な発問と期待する生徒の反応	指導上の留意点
○ 厳しい差別を受けた勝子について考える。	○ 「勝子が初め、出身地が言えなかった時の気持ちはどんなだっただろう。」 ・ 言えば差別される。 ・ 支えてくれる仲間がない、ひとりぼっち。 ・ 差別の苦しさを知っているから ・ まわりに自信がない、不安。	○ 勝子の置かれている苦しい状況、いたみを、自分のこととしてとらえさせたい。 ○ 勝子が弱いのではなく、出身地を隠さなくてはならない部落差別のしんどさをつかませたい。 ○ 部落差別に対する憤りをもたせたい
○ 勇気を持って真実を貫き通そうとした勝子の生き方につ	○ 「勝子に出身地を言わせたものは何だったんだろう。そして、愛子に必死で訴える勝子の気持ちはどうだっただろう。」 ・ かくすことはない、恥ずかしが	○ 勝子の前向きな生き方に共感させたい。 ○ 何が差別であるのかをとらえさせる

いて考える	ることはない。 ・差別に負けたくない。逃げたくない。 ・愛子に間違っていることを分かってもらいたい。 ・人間として値打ちある生き方をしたい。 ・差別と闘っていこう。 ・中学の頃の支えてくれた友達や先生を思い出して。	○真実を貫くことが人間として値打ちのある生き方であることをとらえさせたい。
	○「『私の目をみて!』と訴えた勝子から、何を感じ、何を学ぶか」 ・真実を貫こうとしている勝子のすばらしさ。 ・差別に負けない強さ、勇気、やさしさ。 ・差別と闘っている勝子の生き方 ・憎むべき差別。	○真実を貫く勝子の生き方の美しさと愛子たち（差別する者）の醜さをとらえさせたい。
	○「勝子はこれからどう生きていったらいいだろうか。」 ・差別に負けず、真実を貫いていく。 ・まわりの人から、少しずつ分かってもらおう。 ・仲間を増やしていく。 ・人間らしく生きていく。 ・差別をなくしていく努力をする	○差別に負けず真実を貫く生き方が、真に人間らしい生き方であることをとらえさせ、勝子の側に立ち、共に努力していこうとする態度を育てたい。
○この資料を読んで、私たちは同和問題にかかわって、どのような生き方をしたいか考えるのかを考える。	○「この資料を勉強してきて、これからどうしていこうと思うか。どう生きるのか。」 ・勝子のように、真実を貫いていきたい。 ・正しいことは正しいとし、堂々と生きていきたい。 ・自分の中の差別心をなくす努力をしたい。 ・身近な差別からなくす。 ・誰もが堂々と出身地を言えるような世の中を作っていきたい。	○部落差別のしんどさをとらえさせ、今後差別解消に向けて取り組もうとする態度を、個々の生徒の中に確立させたい。

【授業記録】

2年D組『私の目をみて！』授業記録

1990年12月13日（木）5時限

指導者 西野郁恵

T₁：今まで何時間かかけて『私の目をみて！』という資料をじっくり読んできました。それでみんなは、勝子さんの生き方を通して、自分の生き方についていろいろと考えてきたと思います。今日、こういう形で授業をするのは初めてなので、みんなも緊張しているし、先生も緊張しています。でも、心の中にはたくさんの言いたいことを持っていると思います。頑張って、いつも通りどんどん意見を言ってほしいなと思います。それでは最初の質問ですが、勝子さんが初め工場へ就職したとき、自分の出身地が言えませんでしたね。このときの気持ちはどんなだったでしょう。どうして勝子さんは自分の出身地が言えなかったのでしょうか。そのことについてどう思いますか。

J K：自分が部落出身だとわかったら、差別されるのがこわかったんだと思います。

M I：勝子は自分が部落出身だと知っていたけど、同じ部屋の人に出身地が言えなかったのは、今言っても部落のことを考えてくれないと思ったからだと思います。勝子は新しく入ったばかりなので、もう少しみんなが差別についてどう考えているのか知りたかったのだと思います。

Y K：ぼくはJ K君と同じで、出身地を言ったら自分が差別を受けると言って言わなかったのだと思います。

A S：初めて入社したときから、この工場は差別があったので、みんなに差別されて生きていくのがつらかったからだと思います。

そして、いつかは出身地を言って差別をされるときがくるけど、覚悟してそのときは言わなかったんだと思います。

K M：勝子さんは中学校のときに部落差別のことを勉強して、社会にも部落差別があるのを知っていたから、本当のことを言ったら、差別を受けるかもしれないとおそれたからだと思います。

K K：知らない人がほとんどだし、そんなに親しい人がいなかったから、言うのがつらかったんだと思います。

T₂：最初、出身地が言えなかった勝子さんですが、愛子さんと話しているときに出身地を言いましたね。そういうふうには、勝子さんに出身地を言わせたものっていうのは、いったい何だったんだろうね。愛子さんに一生懸命訴える勝子さんの姿が出てきます。そのときの勝子さんの気持ちはどうだったんでしょう。そのことについて考えてみましょう。

Y K：勝子の良心が、差別から逃げてはいけない、自分から向かっていけと言ったんだと思います。

S E：部落出身者も、そうでない人も、みんな同じだということを知ってほしかったから、訴えたんだと思います。

Y N：勝子さんが愛子さんに本当のことを受けとめてもらう気持ちにさせたのは、中学校の時の友だちや先生にも、このまま部落のことを隠し続けることは悪いと思ったからだと思います。また、愛子さんの、他人に左右される差別心にとっても腹がたったのだと思いました。

T₃：中学校の時の友だちとか、先生のことを言ってくれましたね。他の人どうですか。

- KN：自分も愛子さんたちと同じ人間だということを、もっとよく考えてほしかったんだと思います。
- RF：自分の出身地を恥じたくないし、間違った考えによる差別を一人でも多くの人にわかってもらいたかったのだと思います。
- YY：山嵐先生や母のことを思い出して、勇気がわいてきたのだと思います。
- KM：自分の人間としての価値が決まるときだと思ったからだと思います。
- T₄：愛子さんに一生懸命訴えているときに、勝子さんは「私の目をみて！」と最後に言いましたね。とても心に残る言葉だと思いますが、その言葉からみんなはどんなことを感じましたか。どんなことを学びましたか。
- KM：差別という言葉が憎らしいと思います。
- MI：勝子は自分が部落に生まれたことを誇りに思っていると思います。
- HO：自分から逃げたのでは差別が絶対になくならないと思って、まず自分に勝たなくてはいけないだと思いました。
- RS：自分のやっていることは間違っていないと思ったから、「私の目をみて！」と言ったと思います。
- AS：「私の目をみて！部落出身ということで人間として汚い目をしとうで」とか、「部落の人の目は汚いで」と言いたかったからだと思います。
- KM：自分は部落差別のことに触れても、こうやって下を向かず堂々と顔を上げている姿を見てほしかったのだと思います。
- NK：勇気を出してはっきり言うときの目を見てほしかったと思います。私は、勝子はすごく勇気のある人だと思いました。
- KS：部落差別をなくそうとする勇気だと思います。
- RT：真剣になって部落差別をなくそうとする勇気と、勝子のまっすぐな心を学びました。
- KK：勝子は悲しみと差別心に対する怒りをわかってもらうため、必死で顔を上げていました。ここに勝子の力強さを感じました。
- T₅：「私の目をみて！」と一生懸命に訴えた勝子さんなのですが、勝子さんはこれから、どういうふうに生きていったらいいと思いますか。勝子さんの思いを、勝子さんを自分と思って、自分のこととして考えてみてください。
- YK：差別から逃げないで、自分から差別に立ち向かって行って、強く生きていかなければならないと思います。
- KK：勝子は自分の意見をはっきり言えたので、これからはそういう差別にあつたら、わかてもらえるまで、自分自身の意見を言い通したらいいいと思います。
- HO：一人一人に少しずつわかってもらうようにしたらいいいと思います。
- SE：会社の中で部落差別のことを知っている人とか、勝子さんのことを本当に理解してくれる人と協力して、差別解消に向けて運動を始めたらいいと思います。
- KM：自分の意見をしっかり述べて、あきらめない心を持ち、努力すればわかってもらえると思います。
- AS：部落の生まれでも人間の価値はあると、一人一人に訴えていけば、この工場でもいつかは差別がなくなると思います。
- HO：自分から差別に立ち向かって自分の意見などをはっきり言って、部落差別とはこういうものだときちんとわかってもらっていい

たらしいと思います。

KH：愛子さんに言ったように一人一人に言って、わかってもらうように努力すればいいと思います。

TK：今まで通り、悪いことは悪いとみんなの前で自分の思っていることをはっきり言えるようにしたらいいと思います。そして、差別をしている人には、差別はいけないんだとはっきり言える人になっていけばいいと思います。

SF：勇気がなければ差別をなくすことなんてできないと思いました。この文章を読んでいると、勝子さんには勇気があっていいと思いました。勝子さん自身になって、私も私自身の勇気を引き出していききたいと思います。

HO：自分から差別に立ち向かっていかなければならないと思います。

RF：部落問題を解決していくためには、愛子さんに対する勝子さんのような、毅然とした態度が必要だと思います。

T。：この『私の目をみて！』という資料を学習してきて、これから自分はこうやっていこうと思うか、どんな生活をしていこうと思うかということを発表してほしいと思います。昨日まで考えてきた上に今日クラスみんなの意見をたくさん聞きました。それで、変わったところもあると思います。また、自分の考えが深まったところもあると思うのでそんなことも含めて発表してください。

NK：間違っていることは間違っていると、はっきり言っていきたいと思います。

RT：同和問題についての勉強の場をもっとつくり、みんなが理解し協力し合って取り組

んでいけばいいと思います。

MO：部落差別に負けず胸をはって生きていきたいです。

AS：私は、これから部落問題に対して人の立場に立って物事を考え、家族や友だちとも深く考え話し合っていかなければなりません。そして、自分からも差別心をなくして、この2年D組からも差別がなくなったらいいと思います。

KH：差別を受けている人がどれだけ苦しんでいるかを考え、差別する人がいれば止められるようにしたい。そして、部落の人も自分から差別をなくしていくという気持ちがあつたらいいと思います。

KK：もっと差別についての学習をして、まず自分から差別をなくし、みんなにも差別のこわさをわかってもらいたい。これからは差別に負けない強い心を持ちたいです。

TM：自分自身も少し自信がないけれど、部落問題や差別とかいう言葉を耳にしないような社会にしていきたいと思います。そのためには、身のまわりの問題を自分自身がじっくり考えて行動していきたいと思います。

KN：どうしたら部落差別がなくなるかということ話を話し合っていけばいいと思います。

HO：部落差別から逃げてはいけなし、部落差別でなくても、まずクラスや身近なところからやっていかなければいけないと思います。

KK：勝子さんのように、最初は言えなかったことを愛子さんに言ったように、人々に訴えていきたいです。

YN：私はこの資料を通して、心から勝子さんの悲しい気持ちや怒りを受け止めました。私は、今まで本当に真剣に同和問題につい

て学んでいませんでした。でも、この資料を通じて今必要な差別に対する気持ちがよみがえってきました。これからはこの難しい問題を抱えて、どこまで進んでいけるかわかりませんが、逃げずに、他人事とせず考えていきます。

RH：自分も勝子と同じように差別に取り組んでいきたいと思います。

KM：部落差別を受けている人の痛さやつらさをみんなで考えて、みんなで同和問題について話し合ったりして、自分の心の中にある差別に対する弱い心をもっと強くしていきたいと思います。

T₁：この『私の目をみて！』という資料で、みんな一生懸命に考えてきましたね。勝子さんの生き方に感動もしたし、いろいろと学んだし、また、自分の生活を振り返って、いろいろ考えてもきました。考えたことが言葉だけで終わらないようにこれからも頑張っていこうね。それから、これからまた差別についてとか、人としての生き方とか、みんなで一緒に、先生も一緒に考えていきたいなあと思っています。これで終わります。

2年全体の『私の目をみて！』授業記録

1990年12月13日（木）6時限

指導者 森 口 健 司

T₁：この後、いつもの通り次の6時間目、学年全体でD組の授業を振り返りながら、資料『私の目をみて！』について考えてみたいと思います。10分間、休憩を取りますが、休憩の間、今から言うことを考えておいてください。資料の中で、愛子さんが、「部落の人はこわい」と言っていますね。また

他にもいろいろと勝子さんにとってつらく厳しい差別的な言葉を口にしてしています。あれほど勝子に厳しく差別的なことを言った愛子が、勝子の訴えを聞く中で、「でも、今の時代にもう差別はないでしょう」と言っていますね。さっきまで勝子の胸を引き裂くような、勝子がものが言えなくなるようなつらい言葉を吐いた愛子が、しゃあしゃあとと言いましたね。今日の授業で、勝子に寄せていろいろ語ってくれたように、こういう言葉を吐く愛子について考えて、みんなの思いを出してほしい。自分の胸の中に、愛子はいないだろうかということを考えてみてください。休憩に入ります。

（10分間の休憩）

T₂：それでは始めます。2年生全体で同和問題について考えていこうということで、こういう授業、体育館でやる授業に1学期から取り組んできたわけですが、今日のこの機会にもう一回考えてほしいと思うんです。今、席をぐっと前に寄せてきましたが、隣にいる友だちを本当に心から信頼できますか。非常に切ない話があります。あれだけソフトボールをしたり、バスケットボールをしたりして楽しく過ごした仲間が、中学校を出て上級学校へ行ったときに、平然と仲間を裏切っていく。仲間を売る。ある高校の同和教育を担当している先生から、こんな切ないことがあったと数年前に聞かされたことです。違う中学校からきた友だちに「あの子とあの子が部落の子でよ」と告げる。「あの家がそうでよ」と話す。そんな話をする中で、自分は部落の人間でないことを示していく。つい数ヶ月前まで一緒に頑張っていたはずの仲間を売る。こう

いう話を高校の先生から聞いたときに、中学校でやられた同和教育って何だったんだろうとつくづく思ったんです。板野中学校に学ぶみんなが本当の仲間となって、悲しみや苦しみ、喜び、それぞれの内に秘められた本当の思いがわかり合う、みんな一人一人の生き方をいつまでも支えていくような同和教育の学習が、2年の仲間全体の中でできたらと思い、この取り組みが始まったんです。今日のD組の頑張りに応えて、D組の授業を見ての感想を、最初に語ってくれたらと思います。そして、その後授業の核心に迫っていきたいと思います。それでは、D組の授業について思うことを発表してください。

MS：D組の授業を見て思ったことは、みんな積極的に手を挙げていたことがよかったと思います。それと、もう少し大きな声で言ってくれたらよかったと思います。

KS：私がこの資料を読んで感想をまとめたときより、すごく考えていたのでみんなすごいなあと思いました。

TM：自分の意見を言えてよかったけれど、もう少し大きな声で言ってくれたらよかったと思います。私たちのクラスがやったときより、よく考えていたし、自分の意見もちゃんとあったのでよかったと思います。

YI：KSさんが言ったように、自分の意見と違った意見があって、考えさせられたところがありました。でも、先生にあてられるまで待っている人もいたので、もっと自分から手を挙げたら、もっとすごい授業になったと思います。

T：授業の中で、いろいろと勝子さんに寄せて語ってくれました。さっき休憩に入る前

に聞いたこと、あれほど勝子に対して厳しいことを言った愛子、「でも、もう差別はないでしょう」と言った愛子の姿に寄せて思うこと、感じることを発表してほしいと思います。

MS：愛子さんは、世間のことを全然知らないのかもしれないけれど、あれだけ差別的なことを言って、それでも自分では差別しているとわからないなんて、ぼくにはちょっと信じられないことです。

TH：ぼくは愛子のことがとても許せません。勝子に対して差別しているのにそれも気がつかないなんて、なんか勝子のことを侮辱していて、ぼくは勝子の気持ちがよくわかるような気がします。

TN：愛子は勝子に対して、いろいろ差別的なことを言ったりして、そのことに気付かないことはいけないことだと思います。

YI：さっき3人が言ったように、愛子も悪いと思うけど、まわりにいる人が愛子にちゃんと同和教育をしてこなかったということだから、まわりの人の責任もあると思います。

T：愛子は同和教育を受けてこなかったんだろうか。

YI：私が同和教育を受けてないのかなと思ったところは、勝子が「部落ってなに」と聞いたときに、愛子が「平民より下の人」と言ったので、どこかでゆがんだ知識だけを教えてもらう同和教育を受けてきたんだと思いました。

T：差別があるということは教えられているし、知っている。平民の下身分という社会の教科書に載っているような知識だけは知っているということやな。知識だけの同

和教育は受けているということやな。

MN：私は、同和教育を受けても差別の心はな
くならないんだなあと思います。

SN：私は、ちゃんとした同和教育を受けてい
れば、なくなると思うけど、まだ自分の心
の中に、少しでも差別心が残っていれば、
見た目とか住んでいるところで差別してし
まうと思います。

T。：ちゃんとした同和教育ってどんなんだろ
う。今日のはちゃんとした同和教育だった
だろうか。今、MNさん、SNさん、YI
さんが言ったことについて付け加えて言っ
てください。

TN：差別しているのに気付かないのではいけ
ないと思います。もっと差別というものの
本質や実態、みにくさを知っていくことが
同和教育の基本だと思います。

MK：愛子は、一応同和問題の学習をしている
と思うけど、今まで一度も真剣に考えたこ
とがないので簡単に差別してしまうのだと
思います。

YY：同和問題の学習も大切かもしれないけれ
ど、それを受ける愛子さん自身の気持ちも
大切だと思います。

T。：同和問題の学習を受けていく側の姿勢と
いうか、どういうふうに学んでいくかとい
うことが大切だということやな。

AY：YYさんが言ったように、愛子さんのよ
うな人にも同和問題について真剣に考えて
ほしいと思います。

AE：確かに同和問題の学習も大切かもしれな
いけれど、YYさんの言ったように、愛子
さん自身の気持ちも大切だと思います。で
も同和問題学習をしても、当の愛子さんが、
先に「部落の人はこわい」という気持ちを

他の人から教えこまれていたら、どうしよ
うもないんじゃないかと思います。

T。：差別心が植え付けられていたらしかったが
ない。それでは、どのような同和問題の学
習をしていったらいいんだろうか。愛子の
受けてきた同和教育、愛子の受け方にも問
題があったかもしれないけれど、どのよう
な同和問題の学習が必要なんだろうか。

HI：これが差別の言葉だとか、これが差別の
姿だとか言うことがわかるような勉強が、
本当の差別をなくしていく勉強だと思います。

T。：いろいろと勉強していく中で、どうい
うふうに部落差別ができ、どういうふうに差
別が残されてきたかということは、ほとん
どの人が知っている。にもかかわらず、ど
うして差別をしていくんだろうか。今から
言うことをしっかりかみしめて考えてみて
ください。あるお母さんが、自分の娘の結
婚をどうしても認めない。それは相手が部
落の青年だったからなんです。そのお母さ
ん、その二人の結婚を引き裂こうと、本当
にびっくりするような差別的な言葉を吐く
んです。いろんな人が間に入って、二人が
幸せになれるように必死で努力したんです
けど、認めてくれない。たまりかねて、間
に入った人が、そのお母さんに「どうして
そこまで彼を差別し、結婚に反対するのか」
と聞いたときに、お母さんは「差別はいけ
ません」と言うんです。部落の青年を一言
で黙らせてしまう差別的な言葉を吐いてき
たお母さんも、差別はいけないということ
は知っている。そのお母さんは知識として
の同和問題は知っている。それなのに、な
ぜそこまで差別するんだろう。今の話どう

思いますか。今の話に重ねて差別について
思うことを発表してください。

Y O : 差別するのはその人が優越感を得たいと
か、自分のストレスを発散させるためにし
ているように思います。

K T : 差別してはいけないとわかっていても、
まわりの人のほとんどが差別しているため、
自分が差別してもあたりまえと思ってしま
うんだと思います。

MS : 自分にあまり得がないのに差別するのは、
結婚したら部落とかかわるということで、
まわりの人の目が気になって、まわりの人
に「あの家が……」とか言われて、まわり
の人たちに自分たちも差別されると思うか
ら、結婚差別があると思います。

T T : まだ、ぼくたちの心に差別心がある限り、
差別はずっと残っていくと思います。

MS : 私も T T 君の言うこともあると思います
が、差別心というものは、自分でなくして
いかなければどうにもならないと思います。

T₁₀ : どういうふうになくしていくのか。

MS : もっともっと差別について勉強して、そ
の勉強をしながらかくしていくんだと思
います。

T₁₁ : 自分自身の差別心を洗っていくような同
和問題の学習が、愛子はできていたろう
か。みんなに聞く。自分自身の中にある差
別心を洗うような同和問題の学習ができて
いるだろうか。私の中にある、だれかを見
下げる心、だれかを踏みつける心、自分以
下を求めていくような差別心を洗っていく
ような同和問題の学習が、今本当にできて
いるだろうか。言葉では、差別はいけませ
んと言える。しかし、人を殺すような言葉
を平然と吐いていく。それが今みんなが生

きている社会なんです。みんながその社会
に出ていくとき、板野中学校で勉強したこ
とがずっとつながって行って、差別を許さ
ないという生き方を貫くことができるかど
うかが、みんなに問われていると思うん
です。もう一回言います。みんなの問題です。

私は部落に生まれなかったから関係ないの
ではないか。私は部落に生まれたから部落
差別はしないのか。部落差別は、すべての
人間の問題です。また、部落に生まれた人
だってちゃんとした同和問題の学習をして
いかなければ、より下を求めて人を差別し
ていくようになってしまうんです。すべて
の人間が、自分の中にある差別性、差別心
を洗いながら、今の自分ではいかんと思い、
よりよい生き方を考えていく。それがこの
学習の意味だと思うんです。『私の目をみ
て！』に寄せて、今全体の間では愛子さん
についていろいろな意見を出してもらいま
したが、今一度この授業に寄せて、それぞ
れの思いをかみしめてほしいと思うんです。

K S : 部落差別とは別のことになるけど、人の
ことを陰でこそこそ言うことが多いです。
こそこそ言わずにその子に言ってあげたら、
その子も悪いところを直すことができるの
で、いじめみたいなのはなくなると思いま
す。

E A : もう少し一人一人が差別のことを考えた
ら、少しずつ差別はなくなると思います。

Y I : みんな差別心をなくしていこうと言うし、
私もなくしていかなあかんと思うけど、学
習していても結局なくせないというか、ど
こかで止まってしまうから、これは自分で
ちゃんと学習できてないのかもしれないけ
れど、私みたいなのが愛子さんだと思うか

ら、もっとみんなで深くやっていけたら自分も変わるかなあとと思います。

SN：私は、間違ったことを信じている人たちに本当のことを教えていって、勇気を出さなくても自分の出身地を堂々と言えるようにしていかなければならないと思います。

MK：ほくにも差別心があって、自分が気付かないところで差別してしまっていると思います。

TN：ほくは、まず自分が差別をしていることに気付かなければならないと思います。

KM：私にも差別心があると思うので、努力して差別心をなくせるように頑張って、私から身のまわりの差別をなくしていきたいと思います。

KM：こんなこと言ったら怒られるかもしれないけれど……私は差別があると先生から教えられて……それは先生たちが……部落出身……。

T₁₂：先生に言わせてくれるか。YIさんがさっき言ってくれたし、今のKMさんの心の声がどれだけみんなに届いているか。本当の仲間になっていく、そんな部落問題の勉強をしていきたいと思う。人間は、人のこと、遠くのことに対しては美しくいられる。美しい言葉を吐くこともできる。でも、近くの出来事や自分自身の問題になると、あれほど美しかった人が、あれほど美しい言葉を吐いた人が、見事に差別者になっていき、みにくさをさらけ出していく。そんな悲しい現実がいっぱいある。私たちはそれぞれが持っている本当の思いを出し合える集団でありたいし、関係でありたいし、教室でありたいし、学年でありたい。その思いをお互いが大事にし合いながら、共に

励まし、支え合いながら生きていく絆で結ばれたい。この問題を自分自身の生き方の問題としてとらえ、許さない、許せないんだという生き方をこれからも勉強していきたいと思います。涙を流すものがない、本当に今日も学校へきてよかったと思える教室でありたいし、関係でありたいし、学年でありたい。そのために、自分はこの問題にかかわってどう生きるのかという中で、この同和問題の学習をみんなで深めていけたらと思うんです。1月にE組が頑張って授業をしてくれます。みんなで本当の同和問題の学習ができればなあと思います。頑張りましょう。終わります。

この『私の目をみて！』の学習は、板野町解放文化展の作品作成の時期と重なり、学校を上げて同和問題の解決に向けて深く考えていこうとする中で取り組まれ、生徒の内面に鋭く入り込んでいった学習となった。学年全体の授業の中で、最後に自分の思いを語ろうとして涙をこぼしてしまい言葉をつまらせた生徒が、この授業の朝、学級担任に次のような手紙を書いてきている。

『私、すごく、同和問題の授業をしているときが一番つらい思いをします。クラスの全員が、私の方を見ているような気がします。また、思うことなんだけど、みんな心の中では、部落出身でなくてよかったと思っています。私だって、中学一年のときは、他人事のように思っていました。でも、いざ自分だったと気づいたときは、とても悲しかったです。そして、とてもつらくて心の中では、これからかくしていこうとさえ思っていました。これが差別心なんですよ。私みたいに考えている子がたくさ

んいるから、差別がなくなるんです。でも、先生たちが一生懸命になって考えてくれている姿を見ていたら、本心を言わなければならないのではいられませんでした。今日から自分の間違った考えを直していきたいです。そして、あまり涙を流さないようにしたいです。』（KM）

学年全体の授業が終わった後、この生徒のまわりに何人かの生徒の輪ができた。私たちはこのとき、集まってきた生徒たちの話し合いを後ろで静かに聞いていて、同情ではない、みんなでこの問題を解決していくんだという思いが、しっかりと芽生えてきたんだという気持ちになった。私たちはこの営みをより確かなものとしていくために、私たちのすべてをかけて頑張らなければならないという決意を新たにした。その輪の中で話し合っていた、一人の生徒が翌日記してきた生活ノートを紹介したい。

『今日2年D組の公開授業がありました。最後にKMさんが泣きました。あとで理由を聞いてみると、前に美術の時間、KMさんは自分が部落出身であることをみんなの前で言ったそうです。KMさん自身、隠しておくのがいやで、そしてみんなにわかってもらいたかったらしいです。それからみんなに違う目で見られているようで怖いそうです。今日の授業のときも、みんなにわかってほしくてそのことを言おうとしたけど、涙が出てきて言えなかったと言っていました。』

YIさんやASさん、KMさん、NKさん、RSさんなど、みんながKMさんのそばでいると、KMさんが、「YIさん、私のこと違う目で見たことある」と聞きました。YIさんは、正直に、「ごめん、今まで違う目で見たことがあったかもしれん……。けど、頑張ってるおすけん、何でも私に言うてきて……」そう言いま

した。

KMさんは、少し泣きやみました。「私、もう同和問題の勉強したあない」KMさんが言いました。みんな、一瞬考えました。

私は、「KMさんみたいにつらい思いをする人がいないように学習しようよ」と言ったけど、後でけっこう考えた。

もし、同和問題の勉強をしなければ、自分の子どもに何も教えてあげることができない。そのままにしておいたらどうだろう。何も知らずに育って友だちをつくって、そうしたら差別はなくなるかもしれない。本当にそれでなくなるものだろうか。

正直に言って自分の心から、差別の心を全くなくすことは、私にはできないと思う。部落差別がなくなっても、やっぱり自分以下を求める心は残るだろうなと思う。そのために、部落差別やいろいろな差別、自分の中にある差別心、自分以下を求めていこうとする情けない心、そんな思いを美しくしていくために同和問題の学習は、大切に続けていかなければならないと思う。

私は、口先だけで、差別はいけない、差別をなくそうと言うてきた。また、いろんな資料をつかって学習してきたけど、今日、KMさんの涙を見て、KMさんの訴えを聞いて、はじめて、本当に部落差別を知った。すごくつらかった情けなかった。

このことは、だれかが言うてくれなかったら、わからなかったことだと思う。

そのだれかにKMさんがなってくれたこと、KMさんにありがとうが言いたい。私は大事な何かを知らんと大人になるとこだった。

みんなも、今日のことで本当にわかったと思う。

KMさんの質問に戸惑いながらも一生懸命に答えていたY Iさん。

たったまま一生懸命話を聞いていたNKさん、KMさん。

最後に「KMさんが悪くない、悪いのは部落差別をつくった人間じゃ」と言っていたRSさん。

みんないい友だちです。

今日の帰りYKさんとも、今まで話し合ったこともなかった部落差別について考えました。もうすぐテストです。みんなで頑張りたい。』

(SN)

2年全体での授業、その最後の場面で涙をこぼしてしまった生徒、私たちはこの生徒をはじめとする対象地区生徒に、自らの立場を自覚させ人間として人間らしく生き抜くんだという展望と確信を持たせるために、同和問題の学習を徹底的にやらなければならないことを痛感する。涙で締め括られた『私の目をみて！』の学習をより確かなものとしていくために、学年で取り組んだ授業の翌日、学級において再び『私の目をみて！』の学習に取り組んだ。その授業記録を紹介したい。

2年B組『私の目をみて！』授業記録

1990年12月14日(金)4時限

指導者 森 口 健 司

T₁: 昨日、D組の公開授業の後、2年生全体で『私の目をみて！』についてのいろいろな意見や、同和問題学習についてのいろいろな考えを発表してもらったんですけど、私は今もあのときの感動で胸がいっぱいです。授業が終わった後、授業の最後に涙をこぼしてしまったKMさんを取り囲んで何人かの女子が、それぞれの思いを語り合っ

ている姿を私はじっと見ていたんですけど、あのときみんなで同和問題を自分たちの問題として真剣に考えていこうとする集団が、できつつあるなあという思いでいっぱいになりました。私自身、この問題に関わる切ない思い出がいくつかあります。同和問題を学習するとき、部落問題に関わって傷のある人は、苦しくつらいという思いからスタートしていると思います。私も、父親や母親、祖父、祖母の差別の中を生きてきた思いがわかったとき、本当に口惜しいつらい思いになった思い出があります。特に私の祖父はとても厳しい人です。その祖父が私の前でただの一度だけです。部落問題の話をしているときに、涙を私の前で初めて見せました。もう80歳になりますけど、私はもう生涯祖父の涙を見ることがないと思います。その涙はまさしく部落差別に関わる口惜しい思い出、いくら頑張ってもどうにもならなかったことを思い出し、その歯がゆさ口惜しさがこみ上げてきて、私の前で涙をこぼしました。

T₂: 差別の現実、今はなかなか見えにくくなっているけど、まだ解決していない厳しい現実があります。そのことをもっともっと勉強していくんです。この問題を勉強していくということは、部落の人間にとって苦しいです。自分自身の傷をせせくられるようで、つらい気持ちになっていきます。みんなの友だちの一人が書いた文章にこんな一節があります。「先生、私は同和問題の勉強をしているときが一番つらい気持ちになっていきます」と記しています。同和地区に生まれた仲間の中には、こんな気持ちでいる仲間が何人かいると思います。で

きるならば、このことについていつまでもふたをしておいてほしい。このことは本当につらいんです、このつらいことは考えずにいたいんだ。そんな気持ちでいる人も少なくないと思います。でも、今も結婚の問題をはじめとする多くの差別がある以上、このまま放置できないんです。特に結婚に関わって、差別はいけないといっていた人が、結婚の問題だけは違うんだといって、見事に差別者となっていく、そんな悲しい事実を私はたくさん知っているんです。そして、今もその問題に関わって心を痛めています。口惜しい思いをしています。

T₃：私はそんな口惜しい思いをバネとして、差別を許さない学習に自分のすべてをぶつけていきます。4月からいろいろな資料を通して学習してきた。そして、昨日6時間目の学年全体からいろいろな意見が出た『私の目をみて!』の授業を振り返って、みんなの資料に寄せる思い、昨日みんなの腹の中にぐっと沸き起こったことをみんなに語ってほしいと思うんです。

T₄：丸岡忠雄さんの詩『ふるさと』の話をしたことがあります、私のことを部落の人間であると知っている人と、この同和問題の話をしていくことは、とても話がしやすいんです。でも、私のことを部落の人間だと知らない人と同和問題のことに話題がいったとき、いつ私が部落の人間であるということを切り出していこうか、今も戸惑うことがときおりあります。ふるさと、自分の生まれたところを語っていくということは、部落の人間にとってつらいです。なかなか言えないです。資料にえがかれた勝子もそうですね。勝子の自分の出身地が言えない

気持ちをみんなはどうとらえてくれたか、そのことについてみんなが思うことがあったら、最初に発表してください。

S N：勇気がたりなかったのかもしれない。

でも、自分が部落出身であることを言うのに特別な勇気がいるのは、まわりが差別しているからで、差別がなければ出身地を言うのに勇気なんていらなはずだと思います。

T₅：自分の生まれたところ、出身地を言うということはごくあたりまえに、自然に言えるものでなければならぬはずですね。勇気を出さなければ出身地が言えない、そのことがおかしいということですね。

K T：ぼくも、勝子さんが自分の気持ちや出身地が言えないのがおかしいのではなくて、言いたくても言えないくらい部落差別はきつくこわいものだと思います。いくら頑張っても差別はより厳しくエスカレートして、むやみに口に出すと、どんなつらい目に合うかわからない、そのぐらい差別がきつくて勇気があってもなかなか言えないんだと思います。

T₆：今の意見についてどうでしょうか。

Y Y：自分の出身地を言えないのは、すごくつらいことだし、言わせない部落差別の厳しさを私は感じます。

T₇：言えないのではなく言わせない厳しさ、またこの問題を学習したときに部落の人たちを悲しく切ない思いにさせていく。何ですかねえ、それは人の愛を引き裂いたり、幸せを奪ったりする差別が胸はって自分の生まれ育った、自分にとって大切な場所すら言えないようにしているんですね。

M S：私も勝子が自分の出身地を言えなかった

のは、言おうとしてもまた言いたくても、
言ってしまうと職場で差別されるかもしれないという気持ちもあっただろうし、同じ
中学校の仲間もいなくて、一人になったつ
らさもあったからだと思います。

Y K：「職場でどうたたかっていけば」と資料
の最後のところで勝子さんが言っていたけ
ど、私は勝子さんは勝子さんの思いを言っ
ていかなければならないと思います。

T：言わなければ解決していかないというこ
と、それと言えないということが問題であ
るということ。あとどうですか。

MO：U Kさんと同じで私は言うことによって、
みんなわかってくれると思います。

T K：ぼくもみんなに訴えていくことによって
わかってくれると思います。

S N：けど、私は愛子さんに勝子さんが言った
ときに愛子さんはわかってくれなくて、表
面的に差別はないでしょうとごまかしたよ
うに、言ってもわからない人は多くいると
思います。だから、なかなか言えるものでは
ないと思います。

J K：言いにくいことだけど、わかってもらう
ためにはまず言っていかなければならない
と思います。

T N：ぼくも出身地が言えないのが悪いのでは
なくて、言えないようにしているまわりの
人たちが悪いんだと思います。

M H：勝子さんは言ったらいじめられる差別さ
れるということを知っているからこそ、な
かなか言えないんだと思います。

C M：私も、出身地を言ってしまったら、差別
されるだから言えないんだと思います。

T：言わないのではなくて言えない。差別が
あるから言えない。しかし、愛子さんとの

やり取りの中で勝子は語った、必死に訴え
た。この勝子の気持ちを考えてみたい。訴
えた勝子についてみんなが思うことを発表
してください。

K T：愛子は自分が差別していてもしているこ
とに気づいていない。多くの人が差別に苦
しんでいるのに、苦しんでいることすらわ
からない愛子に、勝子は腹が立ったんだと
思います。そして、愛子に差別されている
人は本当にこわいのか、差別している人は
本当にこわくないのか、そのことをわかっ
てほしいという気持ちが勝子を必死にして
いったんだと思います。

S N：K T君と同じような意見なんですけど、愛
子さんにちゃんと自分たちの本当のことを
わかってほしいと思ったからこそ、必死に
訴えたんだと思います。

M K：勝子は我慢できなくなったんだと思いま
す。しかし、感情が高ぶっていても、出身
地を言うのはすごく勇気があることなんだ
と思います。

Y T：勝子が本当のことを語ったとき、勝子は
偉いなあと思いました。私だったらどんな
状況になっても、差別されるのがこわくて
出身地を隠していくと思います。勝子さん
はすごいです。

Y Y：やっぱり勝子は、愛子さんに出身地を語
るのにすごい勇気がいったと思います。そ
れで、もし私が勝子さんの立場ならこれか
ら差別を受けるとわかっていても、必死に
自分のことをわかってもらおうと打ち明け
たと思います。

N N：愛子さんに向かって勝子さんが訴えてい
る姿に感動します。私にはできないと思っ
ます。でも勝子さんが頑張っているようす

を見て、私も頑張らなければと思います。

MF：勝子さんは、愛子さんが言っていることは間違っているということを心からわかってほしかったと思います。

MN：私も、自分たち部落の人間を同じ人間とわかってほしいという気持ちから勝子さんは訴えたんだと思います。

CK：私も、本当のことをわかってほしいから必死に訴えたんだと思います。

T₁₀：同じように「うん、うん」と相槌を打ったら隠せるんですね。でも隠さない、その行為について、その姿についてどう思いますか。

MM：たくさん勉強していたから、同和問題に対して相手にわからせる力があつたし、本当の勇気が育っていたから隠さず、本当の気持ちと言えたんだと思います。

T₁₁：たくさん勉強していたとはどういうことですか。

MM：やっぱり部落差別の厳しさや同和問題とは、どういうものであるかを中学時代に山嵐学級の仲間と、自分の生き方としてしっかり勉強していたということです。

T₁₂：たくさん勉強していたから、自分をごまかすことなく言えたというMM君の意見についてどうですか。

SN：やっぱり、初め出身地が言えなかったのは、勉強していても中学時代の勉強があまり役に立っていなかったと思います。だけど、愛子さんがあまりにもひどいことを言うので、段々と腹が立って本当のことをわかってほしくていったんだと思います。

T₁₃：腹が立った、その腹立ちとは何だろうか。

CM：部落のことで本当のことがわかっていないのに、部落の人を差別していくことにわ

き起こってきた怒りだと思います。

T₁₄：差別していく人を許せない。そのままにしておけないという怒りや腹立ち、それが勝子に勇気を与えていったということですか。他に意見ないですか。

TN：やっぱり、いつまでも自分の心の中に隠しては、本当にわかってもらえないし、何にもよくなっていかないということがわかっていったから、はっきり訴えていくことができたんだと思います。

HM：ぼくは勝子さんは、もうこれ以上自分みたいに差別される人をこの工場内でつくりたくないという思いがあつたから、自分のことを語り訴えることができたんだと思います。

T₁₅：私自身こんな場面を経験したことが何度もあります。私を部落の人間と知らず、私の前でこんなことがよく言えるなあと思うくらい、部落の悪口を言う。そんな場面を教師になってからも何度か経験してきました。去年もありました。あるお宅へ用事があつて行ったとき、偶然その家にきていた近所のおじさんと話をするようになりました。そのおじさん、ある話から私に突っかかってきました。私を部落の人間とは夢にも思わなかったんでしょう。こんなことを口にされました。「学校で、同和教育やしまわるけん、部落の人間がつけあがるんじゃ。今は差別は逆じゃ、わしらが差別されよんじゃ、部落の人間に問題がある、部落の人間が悪いんじゃ」そんな言葉が、私に向かって飛んできました。20分ぐらい静かに聞いていました。悲しくなって、やがて震えるぐらい腹が立ってきました。腹が立って涙が出そうになりました。この資料

と同じですね。私が人間として同和問題解決に情熱を燃やす教師として、本物かどうかが問われているそう思いました。静かに語っていきました。おじさん、それは違うよ、私は部落に生まれただけ、こう生きてきた。私の親は、私の家族は、私に頑張って生き抜いてくれという祈るようなさまざまな願いや思いを託して、私を育ててくれた。私の部落の多くの仲間が、今いろんな苦しみをかみしめながらも前向きに一生懸命生きている。私の胸の中にこみ上げてくるいろいろな話を、本当に穏やかに静かに、しかし、はっきりと語っていきました。そして、最後にこんな話をしました。部落の中にも悪いことをする人がおるかもしれん、でも、部落でない人の中にも悪いことをする人がおるでしょう。それなのに、部落の人間が一人悪いことをしたら、部落全体が悪いときめつけていく。でも、部落でない人が悪いことをしたときは、その家だけのことであり、その人、個人のことで納得していく。一人の部落の人間の問題を部落すべての問題としてすり替えていき差別している。そのことをわかってほしいんです。そんないろいろな話を2時間程続け、わかってくれたかなあ、どうかなあという思いの中で、その日は別れました。1週間ぐらいしてから連絡がありました。その家の人を通じて、またいつか逢いたい、話したいと連絡がありました。2ヶ月ぐらいたって、同じ家で逢いました。初めて会ったときは別人のように穏やかな顔で私に挨拶をしてくれました。その日、しみじみとお前と話ができてよかったということを語ってくれました。

T₁₆: そんな場面がこれからのみんなの人生の中で数限りなくありますよ。私は部落に生まれた、私は部落に生まれなかった、立場は違うかもわからないけど、相槌を打って流されていくか、その場の雰囲気が壊れようがしっかりと間違いを指摘していくことができるか。そんな人間としての値打ちが問われる場面がいっぱいあると思うんです。

T₁₇: 学校もそうですよ。だれかを痛めつけて仲間外れにして、仲良しになっていくことができる、そんな集団があったら、それはおかしいですよ。おかしいことがおかしいといえる勇気があると思うんです。勝子の勇気をもろうて、私たちは生きていかなあかんと思うんです。そして、勝子は愛子とのやり取りの中で「私の目をみて」と言った。その眼には涙です。涙を流しながらも「私の目を見て」と言った勝子の勇気、「私の目をみて」という言葉からみんなはどんなことを思いますか。

S N: 目の前のこと、部落問題に目をそらさないで真剣に考えてほしいという思いが、「私の目をみて」という言葉になったんだと思います。

Y O: どれだけ自分が真剣に言っているのか、わかってほしかったんだと思います。

N I: 本当に差別がないのか、どうかということを知ってほしかったんだと思います。

Y T: 差別の悲しみをわかってほしかったと思います。

K T: 「私の目をみて」という言葉には、私もあなたと同じ心を持っている、それなのにどうして差別されなければならないのかという気持ちが込められていると思います。

K I: 勝子は愛子に自分の本当の気持ちをわかっ

てほしい。それが「私の目をみて！」という言葉になったんだと思います。

MM：K T君が言ったように差別される人間の口惜しさや悲しさを心からわかってほしいという気持ちがあったと思います。

T K：勝子自身も、絶対差別から逃げないという決意がこの「私の目をみて！」という言葉に込められていて、これからは差別とたたかい続けていくと訴えていると思います。

T N：ぼくもK T君の意見にいていて、部落の人を差別しているのは、絶対に間違っているということを心からわかってほしかったんだと思います。

R N：愛子に差別する心をなくしてほしいという願いが、「私の目をみて！本当のことをわかって」という言葉になったんだと思います。

T₁₈：でも、勝子が生きていく職場というのは厳しいですね。昨日の授業の中で、C組のY Iさんが話をしたこと、KSさんが後半語ってくれたこと。『私の目をみて！』を今回勉強したこと、部落問題を学ぶということは何なんだろう。どんな意味があるんだろうか。

T₁₉：この中にも、「先生、この勉強するんぼんまにつらい」という人がおると思います。また、「この勉強は必死になってやらないかん」という気持ちになっている人もいます。同和問題を学ぶということは何なんだろう。どんな意味があるんだろうか。重苦しいつらい気持ち、ほっといたら、そっとしといたら自然となくなっていくんでないんという気持ち。私にもそんな気持ちがかつてなかったとは言えません。でも、この学習を深めていく中で、それは

違うんだ、わが生命の営みとして、自分の生きていく使命として、この問題に必死に取り組んでいくんだという思いが生まれてきて、私は毎年、年がかわるときに新しい年の手帳に一つの詩を書き続けているんです。その詩と出会ってもう6年ぐらいになります。その詩は、『よろこび』という西口敏夫という先生が書かれた詩です。

部落で生まれ、
部落で育ち、
部落でくらし、
運動と教育にいのちをかけて六十年。

或るときは、烈火の叫びとなり、
或るときは、草にすだく虫の声となり、
或るときは、鋭く差別の事実に迫り、
或るときは、静かに差別の矛盾を訴えた。

このみちは、きびしい荊の道なれど、
この道はわが生涯のつとめなり。

ゆくさきは、幾多迫害ありとても、
この営みは、わが終生の、運命なり。

しかして、この営みは、
わが生命の生きがいにして、
わが生命のよろこびなり。

T₂₀：部落差別を解消していく営み、それは人間として生きる喜びなんだという、私の生涯の宝物である詩です。この問題を勉強していくということは、どんな意味があるのか、たとえば学習会がある。どうして学習会があるんだろうと悩んでいる人もいて

しょう。この問題に関わって、今みんなが
思っていることを今日の授業の最後に発表
してほしいと思うんです。

YK：今、先生が学習会について話を出してく
れたけど、私は学習会についておかしいと
思っています。小学校のとき、友だちにつ
いて学習会にいったとき、私はあのときは
一緒に勉強しようという気持ちでついていっ
たのに、YKさんはこんでいいけんといっ
て、先生に帰されたことがあったので、私
はおかしいと思い続けています。

T₂₁：学習会は、先生が中学2年のときに県下
の同和地区のある学校のほとんどで実施さ
れるようになったんです。学習会の大きな
願いの一つは、部落の子どもにしっかりと
同和問題の勉強をさせていくということな
んです。私も、中学当時、学習会場で部落
はなぜつくられ、どのように差別が残され
たかということを学び、自分は部落に生ま
れた人間としてどのように生きていくかとい
うことを部落の仲間と共に語り合った思
い出があります。学習会は差別の中を生き
ていかなければならない部落の子どもたち
に、部落の人間として、どのように生きて
いくかという自覚を持たせ、部落の仲間が
つながり結び付いていく、そして、共に励
まし合いながら生きていくという話し合い
をする場であると思うんです。

T₂₂：それともう一つの願いは部落の生徒に学
力をつけるということです。学習会ができ
る前より、社会には部落差別が厳しく存在
し、部落の進学率は、徳島県全体の進学率
と比較して、20～30%ひらいていたんです。
そして、今もまだ8～10%のひらきがある
んです。その差がなかなか縮まらない。そ

れは差別があるからなんです。そんな二つ
の願いを持って学習会が実施されています。

部落の子どもたちが中心になって、部落問
題を解決するために学習会があるというこ
とをわかってほしいんです。この学習会に
関わって何か意見があったらお願いします。

YY：私自身、小学校の低学年の頃から学習会
に行っていたんだけど、自分自身が部落に
生まれたということを知らんかって、しん
だいなあというだらけた気持ちで行ってい
たとき、あるとき先生が「あんたら、どう
して学習会にきよるかわかるで？」と言わ
れたので、私は軽い気持ちで「そんなん知
らん」と答えたら、先生が「あんたらは部
落に生まれたから学習会に行っているんで
よ」というふうに言われたんです。でも、
そのときは部落というのは、どんなものか
知らなかったで、そのままなんとなくし
かわからない状態だったんだけど、5年生
のときに、また先生から「部落に生まれた
ことを誇りに思え」と言われたんです。
でも、どうして誇りに思わないかのか疑
問に思いよって考えてきよったんだけど、
最近思うようになったことは「部落以外の
人は部落差別というのは受けたことがない
と思うんです。部落差別を受けた部落の人
たちしか、部落差別を受ける気持ちとい
うのはわからんと思うから、その気持ちを自
分のまわりのいろんな差別に対してぶつけ
て改善していかなあかん」という気持ちが
自分にわいてきて、ほんで「ああ、学習会
はすごい大事なものなんやなあと思うて、
それから学習会という自分にとって大切な
時間をおろそかにしてはいかんなあ」と思
うようになりました。

T₂₃:今のYYさんの意見について思うことを発表してくれる。

SN:私は前まで学習会は、ないほうが良いと思っていたんです。私自身も差別心があった学習会に行っている子を見たら「ああ、この子も部落の子やなあ」と思って、学習会は部落の子と部落外の子を分けているようであまりいいことはないと思っていたけど、YYさんの話を聞いたら、学習会は差別をなくすために近道というか、とても大切なところなんだと思えてきました。

T₂₄:学習会が部落と部落外を分けていくのではなくて、学習会が学校の同和教育の核となって、より部落と部落外の思いの思いをつなぐ、連携を深めていく、部落差別をみんなでなくしていくんだという同和教育推進の中心に学習会が成立していかなければならないと思うんです。他にどうですか。

JK:差別している人は、自分が部落に生まれたらどんな思いでいるかということを考えて、差別を受けている人のつらさを一つでもわかったら差別する心はなくなっていくと思います。

MS:私も学習会は、いろんな先生が学習会にいて差別に立ち向かって生きていくように、勉強していかんかと進めてくれるから、ほんととは心の中で行かないかんと思うけど、やっぱりどこかに差別があつてなかなか行くことができません。

RM:私も、学習会に対しておかしいなあと思っています。小学校のときに私が学習会の会場に行ったら、先生に帰きなさいと言われて、どうしてきたらいいのかなあと思っていたことがありました。でも、YYさん

やみんなの話を聞いていると、今まで部落の子は自分とは違うんだという気持ちがかこかにあつて差別をしていたと思います。

T₂₅:私は昨日始まったと思います。昨日の6時間目に本当の同和教育が始まったと思うんです。本当の意味で、わが生命をかける教育は昨日始まった。決して許さないという、差別しないと言うだけではない、差別できないという思いをすべての人間の生き方にしていく、そのためにこのことを徹底的に学んでいく。何が間違っているのかということを徹底的にわからせていく力、わからせていく営み。今していることで涙が出そうになる。それは差別があるから、このことがこの思いが胸張って話していける学校や学級や、そしてそういう社会をつくっていく。そのためにこの営みを続けていく。みんなは、私の大切な仲間なんです。何を求めていくか、もっともつというろんな話を続けていきたいし、みんなの思いをしっかりとまとめていきたいと思います。一生懸命に発表してくれたみんなにありがとうという気持ちでいっぱいです。私は絶対に負けない、生命をかけて生命終わるまでこの教育に頑張り続けます。終わります。

授業後の感想をいくつか紹介したい。

『今日の授業の話の中に逆差別という言葉がありました。先生の話を知っていたら、それは違うということがわかりました。部落の人が何か起こしたら、部落全員が悪いということになっていくと先生が言ったけど、ぼくもそう思ったことがあります。でも今思うとはずかしいです。それは、ぼくは部落差別をしていたからです。口で差別はいけないといいながら、心の中は差

別していたんです。ぼくは自分のことが情けないです。ぼくのような思いをしていたら、差別はなくなりません。だから、ぼくはもっともっと部落差別のことについて勉強して、それは間違っているときっぱり言える人間になります。』

『今日、はじめて部落問題について友だちと話し合いました。友だちには内面のことも話し合える友だちと、表面だけで話す友だちが私にはいます。今日、部落問題について話をしたＹＯさんは私の内面も話し合える大事な友だちの一人です。ＹＯさんも、今日の授業が終わったとき、涙を浮かべていました。私と同じことを感じていたのです。うれしかったような安心したような気持ちでした。本当の仲間だと深く深く思いました。この人の言葉がジーンときたとか、いろいろ話をしました、先生の言う通り、そんな心の奥底にあることを話し合うことができてこそ、本当の友だちだなあと感じました。ＹＯさんといるととても安心します。いい友だちです。』

『今日の授業は本当によかったです。今日のはじめて心から同和問題について考えたような気がします。先生は、Ｄ組の公開授業から、本当の同和問題の学習が始まったと言っていたが、私は今日の授業でそう思いました。はっきり言って今までとは違うものを感じました。本当に今、書いている文章は口先でなく、正直な私の本当の気持ちです。私は同じ学年で、部落問題で悩んでいる子がいるとは、今まで知りませんでした。部落だと自分で気付いても平気だと思っていました。私は部落差別を甘くみすぎていたんです。ＹＹさんの話、先生自身の話、詩の話、この三つの話を聞いているとき、不思議と涙が出ました。その涙が感動の涙なのか、同情の涙なのか、悲しみの涙なのか、他の涙なのか、

私にはわかりません。ただ目に涙が浮かぶばかりでした。学習会のことを言っていたとき、なぜ部落の人が勉強しなければならないのか不思議に思いました。勉強しなければならないのは、差別者の方だと思うんです。発表しようと思いましたが、勝子さんのような勇気がなく、とても残念でした。本当に今日はとてもいい授業でした。』

『今日の授業、胸がいっぱいになって涙が出てきた。今までにない悲しさ、腹立ちがこみ上げてきました。こんなに真剣になれた授業は、本当にはじめてでした。』

先生の話にとても心をうたれた。先生自身の体験を笑顔で話していた先生。でも、心の中は少しつらかったと思います。そんなことを考えながら聞いていると、顔が熱くなって、涙が出てきました。ＹＹさんの話も、同じような気持ちになりました。あのときＹＹさん、とても勇気がいったと思います。そして、つらかっただろうと思います。かすかに声がふるえていました。話を聞いていると、なんだか身体がばらばらになったような心地がしました。差別していた心がこわくなりました。

「生命をかけて、生涯、この問題に取り組んでいく」と先生が言った言葉がまだ頭の中に残っています。私も思いました。自分の生まれた家の住所を言うだけでも、たくさんの勇気がいる。というような必要のない勇気をもたなければならない人たちをふやしたくありません。

ＮＩさんと約束しました。「差別なんか絶対にしない」って。約束したからには守りたいと思います。』

『私の最後の意見、長ったらしくなったけど、たまっていたものが全部出せてすっきりしたような気がします。やっぱり授業のとき言ったけ

ど、部落差別っていうのは、部落に生まれた私、学習会に行っている私からなくさなければいけないと思います。だから、すごく勇気があることやけど、私から頑張って差別に立ち向かっていこうと思います。』

『先生、今日の4時間目、とても感動しました。特に先生自身の話のとき、涙が出ました。顔が熱くなって何もしゃべれなかった。先生はえらいと思う。』

おじいちゃんと、話をしました。川端の原田という地域が部落だそうです。じつは、私の住所は川端字原田です。私はびっくりしました。でも、私の家は、道路ぞいにあります。部落は私の家のうらからだそうです。はじめ「いやだ」って思っていました。おじいちゃんから、私の家は部落には入ってないって聞いたときは、ものすごくホッとした。それでハッとした。これも差別ちがうかって、先生の話の聞いていると、涙がでて、腹が立ってくるのに、自分のこととなると、いやだって思うんです。ものすごく、つごうのいい心だなあって思いました。

YYさんのふるえながら、言っているのを聞いて、差別するのが、差別しているのが、バカらしくなってきました。差別のむごさも少しずつわかってきました。

世の中にまだ差別があるのを気付かないのは、その人自身にある、差別の心に気付いていないからだと思います。』

ほとんどの生徒が、私の思いに応え、目には涙さえ浮かべ、絶対に差別をしないと誓う。しかし、自分が被差別の立場であると思ったときに、やっぱりいやだと思う。口ではいろいろな思いが表現できるのに、自分自身が同和問題と正面から関わっていくことを心の底でおそれて

いる。そんな人間としての弱さは、だれの心の中にも潜んでいる。私はその部分をしっかりと洗っていく同和問題の学習を築き上げていかなければ、人間として本物にはなっていないと思う。

人間の内側に潜んでいる他人事としてとらえる心、自分以下を求めていく心を洗い流していくことは、とてもつらいことであるかもしれない。でも、そのことを続けていかなければ、この問題の真の解決はないと考える。

同和問題の学習に取り組んでいく中で問われていくもの、それはどれだけ被差別の立場に立ち切ることができるかということであり、同和問題を学ぶということは、人間としての生き方を問いただしていくことだと思う。

私は部落に生まれた、部落に生まれなかった、それぞれの立場は違っても、それぞれの教師が、人間として同和問題に関わってどのように生き、どのように苦しみ、どのように悩み、どのように悲しみ、そして、その苦しみや悩み、悲しみの中からどのように生きる展望をつかんでいったか。また、今どのように部落差別を解放しようとし、自分自身の差別心を洗い続けているのか。そんな教師自身の生き方、生きざまを生徒一人一人にぶつけ、生徒自身の生き方そのものを問いただしていく。そんな営みの中で痛みを持った生徒に生きる展望を持たせて胸をはらせていく同和問題の学習ができていくのではないだろうか。私は同和問題学習の営みとは、まさしく教師自身の生き方そのものをぶつけ、生徒自身の生き方を問いただしていく営みだと考える。この思いを強くしたのが資料『私の目をみて！』の学習であったと思う。

【資料】

私の目をみて！

土方 鉄

駅から、バスにゆられていくと、やがて、たんぼのなかに、美しい工場の棟のたちならんでいるのが、目のなかにいっぱいにとびこんできました。

くあすこで、今日から、勝子の新しい生活が始まるのや！あの工場の門のなかに、なにが勝子をまっているのか……> 生れてはじめて、あの川のある部落からはなれ、父母のところから巣立ってきた一羽の小鳥のような勝子は、期待に胸をふくらませています。しかし、そのふくらんだ胸のなかにも、かすな不安がよぎるのです。そこには、おそらく差別がまっているだろうからです。

こんどはクラスのなかまはいないし、勝子はひとりぼっちです。

今朝、家をでるとき、母は、着がえなどをいれたポストンバックをもって、市電の停留所まで送りにきてくれたけれど、父は、だまったままでしきいをまたぐ勝子の顔をみつめていたのです。あのとときのあの父の顔が、勝子の目にうかんできます。市電に勝子がのりこむとき、ポストンバックを手わたしてくれながら、

「勝子。気嫌ようして、みんなにかわいがってもらうのやで……」

といってくれた、あのとときのあの母のかすれ声が、耳によみがえってきます。

勝子は、そのとき、鼻の奥がツンとなって泣けそうになったのです。勝子はそれをこらえ、心のなかで、（かあちゃん、おおきに。勝子はがんばるでエ……つよく生きぬくでエ！）と誓っていたのでした。

勝子といっしょに、この日、この織物工場の門をくぐった中卒生たちは、五十人近くもいました。

「新しく入社したみなさんに、全工場あげて期待しています」という、工場長さんの訓話をきいたあと、勝子たちは、寮に案内されました。寮は、廊下をまんなかにして、両側にアパートのように部屋が並んでいる二階建ての木造でした。一つの部屋に六人です。新入社員のもものが、一人ずつはいることになったのです。寮母さんから、「今度入社された勝子さんです。みなさん仲よくしてあげてくださいね」と紹介されて、勝子のはいった部屋には、もう三十ぐらいの人が一人いて、あとの四人は、勝子より二つ三つ年かきの人たちでした。

部屋の人たちは、みな親切でした。押入のあいたところを、使うようにといってくれます。そこには、会社から貸与される布団も一組入っていました。

「わからないことや、困ったことがあれば、いつでもいつでも下さいね。こうして一つ部屋でくらすことになったのですから、お互い助けあっていきましょうね。」

いちばん年かきの春江さんがいってくれます。一人一人、名前と出身地を自己紹介してくれました。春江さんは島根で、あとの人たちは、鳥取と香川の人が二人ずつでした。

「勝子さんは関西ですって……」

「はい。関西ゆてもひろいでしょう。X市なんです」

「わあ、X市って観光地で有名なところやろ。私、修学旅行にいっただけ。X市のどのへん」

陽子という香川の人が、はしゃいでたずねました。

「名所の多い……そんな街のなかとちがうの……もうはずれの……つまらなところですよ」

どうして私は、あの川のある部落の地名をいわないのだろう。みんな遠くはなれた県の人たちだもの、わかるわけないのに……。山嵐先生おくるやろな。学校では、あれだけえらそうにいつてきた私が、こうして、つい部落のことをかくそうしてるんだもの。勝子、平気でいえばいいじゃないの……。という勝子自身の声が、勝子をしかりつけている……。

しかし勝子はいっしょにそのことをいいたせなかつたのです。

やがて、一ヶ月の養成期間が終りました。養成期間の間は、機械のつかい方の講義や、実習などがありました。はじめて工場へはいつて、勝子はびっくりしてしまいました。養成係の男の工員さんから説明されても、なにをいつているのか、ぜんぜん聞えないのです。糸を巻いたコマがくるくるまわり、機械がカチャンガチャンとあがりさがりするにつれて、真白な布地がのびていくのです。

“さあ、私も、仕事らしい仕事ができるぞ！”勝子の胸には闘志がわいてきました。

作業もだいふ覚えられて、職場の人とも仲よしくなってきた、ある日曜日のことでした。勝子が洗面所へいくと、いっしょに入社した隣の部屋の愛子さんがタオルで顔をぬぐっていました。「おはよう」をいいかわしたあと、彼女は声をひそめて、

「勝子ちゃん。この会社で部落の人、たくさんいてんの

やって・・・」

と話しかけてきました。勝子の、いきおいよくうごいていたハブラシの手がびたりととまってしまいました。とうとうきたのだ。私が、人間として値打のあるものであるか、どうかためられるときがきたのだ・・・つめたいものが背すじを流れていきます。

「なに？ 部落って・・・」

勝子は、いっしょうけんめい、たかぶってくる感情をおさえながらいました。

「勝子ちゃん、知らんの」

「うん」

「平民の下のものやがな」

「ふうん。まだ平民ってあったのか・・・」

「ようゆうでしょう。部落って・・・まさか、あんたじゃないやろね」

勝子は、なんとかして笑顔をつくろうとしますが、どうしても顔がこわばってくるのです。

「・・・」

「まさか、あんた・・・」

「もし・・・、もし、私がそうやったら、どうするの」

勝子は決心しました。かくすことはないのです。恥ずかしがることはないのです。

「そんなことないでしょう」

「そうやったらどうするの」

勝子の声は荒くなってきました。感情のたかぶりを、おさえようとしても、おさえきれないのです。

「そんなことない。そんなことないわ・・・。でも、もしそうだとしたら、ただの友人なら、なんともないけど・・・。それ以上はかなんわ」

「それ以上ってなんのこと」

「たとえば異性の人やったら考えなおすわ」

「どうして？」

「どうしてって、かわいいの・・・」

「どうして、かわいいの・・・」

「みんなが、そういつているもの・・・」

「それは、愛子ちゃんの先入観とちがうか・・・。（いうのだ、はっきりいうのだ）それが証拠に、この私がかわいい」

「・・・」

愛子の顔色が、かわってしまいました。とたんに真剣な表情になったのです。

「いままで、私とつきあって、かわいいと思ったことあった」

「ううん・・・」

「部落というのはね、徳川時代にあった、あの士農工商という身分制度なのよ。この四つの身分よりまだ下とされてたのよ。幕府が、百姓町人を、牛のように働かせるために、上みてくらすな下みてくらせ、部落のことと思ったら、おまえらはましだといって、支配しやすいように、こさえたものよ。その人たちの子孫をいまだに差別しているのよ。それはまちがっているのよ」

勝子は、だんだんおちついてきて、中学校でならったことをしゃべりつづけました。

「でも勝子ちゃん、今の時代にはもう差別はないでしょう」

愛子は、うつむきながらいました。

「あなた、いま異性なら考えなおすっていったじゃないの。それが差別の証拠よ」

「けど・・・あなたが、そんなとこの人って信じられないわ」

「じゃ、私の目をみて」

勝子の目には涙がたまってきました。泣いてはいけない、そう思い、こらえようとするのですが、涙はあふれて、頬をつたっておちました。愛子は、ちらと勝子の眼をみあげましたが、すぐ目をふせてしまいました。

「私、あなたにいいたいの、あなたは部落のことをなんにも知らずに、差別してるんだわ。私、いままでも、別ににかくしてたんじゃないのよ。いいだすチャンスがなかっただけ・・・。私、きっと、あなたにわかってもらうわ。根くらべしてでも、わかってもらうわ。あなたが、まちがっているってこと・・・、今日はこれだけにしとく、ハイキングにおくれるから・・・、さあ、愛子ちゃんもいそがなくっちゃ」

そうはいったものの、こんな工場のなかで、どうたたかっていけばいいのか、勝子にはわかりませんでした。

部屋へ遊びにやってきた、二階にいる雅子さんが、陽子さんたちとしゃべっていましたが、「MさんとYさんが、そうやって・・・」などと情報を告げて、わいわいといったりします。それを聞くにつけても、もうじっとしておれません。千七百人の従業員全体に対してどうたかつたらいいのでしょうか。

（出典 「被差別部落のたたかい」 新泉社）